

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：33702

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14110

研究課題名（和文）教員養成段階に特化したレジリエンス育成プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a Resilience Improvement Program specific to the teacher training stage

研究代表者

佐々木 恵理（SASAKI, Eri）

岐阜女子大学・私立大学の部局等・准教授

研究者番号：80714998

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、教師が学び続けていく上で重要になる心理的特性の一つであるレジリエンスを教員養成段階に特化して育成するプログラムを開発することを目的とした。具体的には、学生のレジリエンスに与える心理的要因の検討、教員養成の学生や教師を対象としたレジリエンス育成プログラムのレビュー、プログラムの開発を行った。学習した知識や技能を日常場面に般化して応用していくためには、動画などの活用のみだけでなく、対面の講義形式の活用や、教育・課外活動などで多様な他者と共に課題解決を目指すような学修を積極的に取り入れることでより日常のレジリエンスを発揮することができるように向かわせることが重要であると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

レジリエンスが「学び続ける教師」の成長・発達を促進する要因にどのように影響を与えるのかについては示唆されているが、実証的な解明は未着手である。教師たちのレジリエンスは、積極的に教員養成の段階から育まれ、専門職としての人生のすべての局面において発揮される必要があることが指摘されており、教員養成段階においてレジリエントな学生を育成していくことは喫緊の課題である。学生のレジリエンス育成に貢献することができれば、諸課題に積極的に取り組み自己の成長に結びつける教師を育成することに寄与できる。また、後の教師の資質・能力向上の方策として、教師の心理的資質への重要な示唆を得ることができる。

研究成果の概要（英文）：Resilience is an important psychological trait for teachers to continue learning. The purpose of this project is to develop a program to foster this resilience specifically for the teacher training stage. Specifically, we examined psychological factors affecting student resilience, reviewed resilience development programs for teacher training students and teachers, and developed programs. In order to generalize and apply the knowledge and skills learned to everyday situations, it is necessary not only to use video clips, but also to actively incorporate face-to-face lectures and other forms of learning such as educational and extracurricular activities in which students work together with a variety of others to solve problems. It was thought that this would help them demonstrate resilience in their daily lives.

研究分野：臨床心理学

キーワード：教員養成 レジリエンス 大学生 学び続ける教師

1. 研究開始当初の背景

教育・保育現場では、新任者の心身の不調、職場内での人間関係の不適応など早期離職のリスクを防ぐことは緊喫の課題である。日々の業務の中では、様々な対応が必要であり、それらに対して前向きに対処していくことが求められる。

そこで、本研究では、ストレスへの防衛因子や抵抗力としての“レジリエンス”に着目する。レジリエンスとは「困難な出来事を克服し、その経験を自己の成長の糧として受け入れる状態に導く特性(Grotberg, 2003)」である。レジリエンスを発揮することは、心理的ストレス反応を低減させ、心理的・身体的 well-being が導かれる可能性が示されている(山下ら, 2011)。

これからの時代の教師に求められる資質能力として、「学び続ける教師像」の確立が挙げられている(e.g.中央教育審議会, 2012; 文部科学省, 2015)。この「学び続ける教師像」に関わる心理的要因として、教師研究や教員養成においてレジリエンスといった特性や情動的な側面が、教師が学び続けていく上で重要であることが指摘されている(e.g. 姫野, 2013; 情動の科学的解明と教育などの応用に関する調査研究協力者会議, 2014)。

ストレスへの防衛因子や抵抗力としてだけでなく、日常的な教授・学習活動を通じてよりよい最善の教育を提供するためには高いレジリエンスを有することが求められる。その例として、レジリエンスが高い教師に指導された児童・生徒は、そうでない教師が担当する生徒以上に、学力を伸ばし、目標を達成しやすいことが報告されている(Day, 2008)。

このように、レジリエンスへの注目は、適応や精神的健康との関連から成果が積み重ねられてきた。しかし「学び続ける教師」の成長・発達を促進する要因にどのように影響を与えるのかについて示唆されているが、実証的な解明は未着手である。しかし、教師たちのレジリエンスは、積極的に教員養成の段階から生まれ、専門職としての人生のすべての局面において発揮される必要があることが指摘されており、教員養成段階においてレジリエントな学生を育成していくことは喫緊の課題である。

教員養成段階で学生のレジリエンス育成に貢献することができれば、諸課題に積極的に取り組み自己の成長に結びつける教師を育成することに寄与し、その科学的根拠を示すことができる。また、実証されれば、今後の教師の資質・能力向上の方策として、教師の心理的資質への重要な示唆を得ることができると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、教師が学び続けていく上で重要になる心理的特性の一つであるレジリエンスを教員養成段階に特化して育成するプログラムを開発することを目的とした。

そのために、次の5つの課題を設定した。

学生のレジリエンスが心理的・資質的成長に及ぼすプロセスの解明

学生のレジリエンスに影響を与える心理・社会的要因の検討

教員養成の学生や教師を対象としたレジリエンス育成プログラムの系統的レビュー

プログラムの開発

プログラムの実践と効果検証の5つである。

3. 研究の方法

(1) レジリエンスに影響を与える心理的要因の検討

内省傾向の特徴とレジリエンスの関連を明らかにするために2019年7月に女子大学生(n=22)を対象に質問紙調査を実施した。

また、教師の心理的資質への示唆を得るための探索的調査として、教職経験の豊富な定年後の教師Aに半構造化インタビューを行い、対象者が教職生活で遭遇した困難な課題や体験に対し、どのように乗り越えてきたのか、その背景にある捉え方や信念に着目し内容分析を行った。

(2) 教員養成の学生や教師を対象としたレジリエンス育成プログラムの系統的レビュー

日本における大学生～社会人、教員養成課程学部生、教師を対象としたレジリエンスの向上を目的としたプログラムについて、対象、実施方法、プログラムの構成を整理した。

(3) プログラムの開発と実践

プログラムの開発では、集団プログラムではなくコロナ禍でも活用できる形の e-learning プログラムで、自律的に学習することができるように準備を進めた。

4. 研究成果

(1) レジリエンスに影響を与える心理的要因の検討

調査の一部として、内省傾向の特徴とレジリエンスの関連を明らかにするために、2019年7月に女子大学生(n=22)を対象に質問紙調査を実施した。内省傾向の違いによりレジリエンス得点に違いがみられるかを対応のない t 検定で検討した。その結果、自己関連づけ群(n=10)の学生のほうが、一般記述群(n=12)に比べて、レジリエンス得点が有意に高かった(表1)。特に、自

己関連づけが高い群のほうが、自己効力感が有意に高かった。このことから、学生が自分自身の姿として重ね合わせることができるような取り組みや、自分自身の特徴や性格と合わせてより具体的に自分の実践していくことを意識し内省できるような取り組みがレジリエンス向上のため有用である可能性が示唆された。この成果は、日本保育学会（佐々木，2020）で発表した。

表1 内省傾向各群によるレジリエンス得点の平均値，標準偏差および t 検定結果

項目	自己関連づけ群 (n=10)		一般記述群 (n=12)		F 値	t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
レジリエンス合計得点	112.60	13.89	99.50	12.81	.071	2.30 *
ソーシャルサポート	55.40	4.60	50.25	5.68	.157	2.23 *
自己効力感	40.40	5.64	31.08	5.11	.000	4.06 **
社会性	19.80	2.94	18.75	2.86	.015	.85

注) * $p < .05$, ** $p < .01$ を示す。

インタビュー調査では、「困難を乗り越えてきたことがある」教職経験者を対象としたインタビューを収録することができた。教師の心理的資質への示唆を得るための探索的調査として、教職経験の豊富な定年後の教師 A に半構造化インタビューを行い、対象者が教職生活で遭遇した困難な課題や体験に対し、どのように乗り越えてきたのか、その背景にある捉え方や信念に着目し内容分析を行った。その結果、(1)努力をしながら、時にゆだねること、(2)教師というものを楽しみ、工夫すること、(3)発想や考え方を転換し、常に価値を疑うこと、(4)他者の多様性を認め、自分の世界を広げること(5)他者から学ぶ姿勢を意識することが見出された。

今後、どのような心理的資質にアプローチが可能であり育成可能であるか、定量的調査とともに検討していく必要がある。この成果は、日本教師学学会（佐々木，2021）で発表した。

(2) 教員養成の学生や教師を対象としたレジリエンス育成プログラムの系統的レビュー

日本における大学生～社会人、教員養成課程学部生、教師を対象としたレジリエンスの向上を目的としたプログラムについて、対象、実施方法、プログラムの構成を整理した。整理した7つのプログラムのうち、講義や研修形式の方法が5つ、オンラインやオンデマンドを活用した方法が2つであった。講義や研修形式、オンライン形式のどちらの方法にとっても、個人の省察が他者との対話や関係性の中からより深まる状況を設定していく機会が含まれたプログラム構成が必要である。実施回数や期間をみると、1回～7回であり、期間として1日～7週間に渡る実践であった。また、大学生や教員養成課程の学生を対象とした実践は、講義時間内での取組であった。講義内での取組は、学生にとっては、対象となる全員が取組みやすいものであるが、それぞれの時期に応じた方法により、レジリエンス向上のプログラムが提供されることが望ましいことが明らかになった。この成果は、論文紀要（佐々木，2024）として発表した。

(3) プログラムの開発と実践

プログラムの開発では、集団プログラムではなくコロナ禍でも活用できる形の e-learning プログラムで、自律的に学習することができるように準備を進めた。プログラムは、各項の目的、到達目標を記したテキスト資料、動画資料、課題で構成し、学習者が日常生活と結び付けて課題を提示することで、意欲的に取り組み、継続しやすいような工夫を行い作成した。その際、学習した知識や技能を日常場面に般化して応用していくためには、動画などの活用のみだけではなく、対面の講義形式の活用や、教育活動や課外活動などで多様な他者と共に課題解決を目指すような学修を積極的に取り入れることでより日常のレジリエンスを発揮することができるように向かわせることが重要であると考えられた。今回、研究の遅れに伴い十分な効果検証の実施まで行うことができなかつたため、科研費期間は終了するが、引き続き、効果検証にむけて準備を進めていく。また、学会での発表や論文執筆を進めていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 佐々木恵理	4. 巻 53
2. 論文標題 教員養成段階におけるレジリエンス育成にむけた手法への一考察	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 岐阜女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 17-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐々木恵理	4. 巻 51
2. 論文標題 大規模講義における「ロイロノート・スクール」を活用した意見交流の方法 コロナ禍の「児童学概論」での実践から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岐阜女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 75-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐々木恵理	4. 巻 75（5）
2. 論文標題 教職員のすべてがストレスを感じていると認識し、配慮していくことが求められる（特集 レジリエンスを高め、不安な日々を乗り越えるために コロナ時代の教師のストレスマネジメント）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 総合教育技術	6. 最初と最後の頁 52-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木恵理・堀田亮・西尾彰泰・山本真由美	4. 巻 56
2. 論文標題 大学新入生の首尾一貫感覚（SOC）と生活習慣、精神的健康度との関連	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 199-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤陽子・佐々木恵理・土井のぞみ・吉村希至	4. 巻 49
2. 論文標題 大学生生活を通して保育士・教諭として身につく資質・能力に関する考察～BigFive尺度を用いた性格特性との関わりに着目して～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岐阜女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 15-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 佐々木恵理・岡田康志・横山育美・辻川裕一・森俊之
2. 発表標題 臨床家としての職業的成長について考える 10年の歩みの反省的实践による自己成長
3. 学会等名 日本心理臨床学会第40回大会自主シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐々木恵理
2. 発表標題 保育者を目指す学生の内省傾向とレジリエンスの関連
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐々木恵理
2. 発表標題 なぜ、前向きな教師でいられるのか？ 退職教師へのインタビュー分析から
3. 学会等名 日本教師学学会第22回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堀田亮・川上ちひろ・佐々木恵理
2. 発表標題 大学生はどんなライフスキルを獲得したいのか～A大学における調査から～
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀田亮・川上ちひろ・高口僚太郎・佐々木恵理・西尾彰泰・栗木由美子・今村七菜子・加納亜紀・山本真由美
2. 発表標題 半構造化面接調査による大学生が求めるライフスキルや知識の探索的検討
3. 学会等名 第57回全国大学保健管理集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 眞喜志悦子・三宅茜巳・佐々木恵理・加藤真由美・後藤忠彦
2. 発表標題 デジタルアーカイブ利活用のためのコミュニティ形成の実践
3. 学会等名 第14回デジタルアーカイブ研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------